時　報　No.2

1950.7

目次

新入部員に望む
八方より鹿島槍へ
槍より燕へ
春山で用いられた計画的ビヴァークとしての雪洞
春山食糧・気象報告
1950 年度夏山計画
24 年度ノート
集会記録

大阪大學山岳會

新入部員に望む

篠 田 軍 治

一年間の歩みを反省してみると色々と気のつくことがある。春、夏、秋、冬の休暇を中心とした山行、平素のトレーニング、集会等にも、もっとはっきりした計画性が望まれるし万一の場合を考えての対策も樹立しておく必要もあるし、その他色々と確立すべき組織なり機構なりが残されていることが認められる。

併しそれ等は今年の課題として、こゝには触れないことにして今春新制大学々生を基幹として行った山行について特に感じたことを述べてみよう。

昨年度の新制大は九月から授業を開始したため、旧制の山行の期間が試験期に当ったので止むなく四月末に新制中心の槍ヶ岳を計画した。この計画に旧制からリーダーを出すかどうかは相当問題があったところであり、事実入学後、日浅いとは言っても昨秋の白峰や木曽駒、冬の白馬入りと雪の方では相当トレーニングも行ったつもりではあるし、年齢的にも旧制高校以上であるから何も旧制大からリーダーを出すにも及ばないとも考えられたのであるが、今年の気候的な異変、まだ十分に場数を踏んでいないこと等を考慮するとどうしても新制大だけで行かす気になれなかったので春山から帰って間もない家田君に行ってもらったわけであり、この点は自分だけの意見ではなく皆の一致した見解だった。

結果は報告の方に詳しく述べてあるように予定の計画を無事完了したとは言え、多くの検討を要すべき事柄を残した。これは天候や思いがけない病人がでたことにも災いされたのは確かであるが、尚今後の新部員の育成のための重要な反省資料であることには間違いない。技術的面の検討は他日に譲って、これをも少し違った立場から眺めて見よう。戦後派というと戦前派の人達からは今どきのアプレゲールはと一口に片附けられてしまう場合が多く、学校では学力の低下がよく問題になる。併し例えば入学試験の成績などを見ると戦前にもこんなよいクラスがあったかと吃驚するような場合に屢々ぶつかることがある。併し、だからといって学力は戦前以上であるとは決して言うことは出来ない、事実、少し応用的な、十分に内容を消化しきっていなければ解けないような問題に出会うと直に欠陥を暴露して、戦前に較べて遙かに劣るという結果を出すことが多い。こうした欠陥が山でも、何か変ったことがあった場合に現われて来るのではなかろうか。今の新制大の部員には極く特殊の人を除いて戦前から山をやっていた人はない。中学

校で夏山を相当やった後に高度の技術を教えられたというのでなくて、いきなり、戦前と同じ程度の山行をやらせるために速成的に途中を飛ばして氷雪技術などを教えこまれる訳である。言わば氷や雪の上を相当歩けるようになってからアイゼンを付け缺を補うのではなくて始めからアイゼンで、アイゼン無しでは全く歩けないのである。だから、最近の中学生が計算能力が著しく不足でも計算器使ったら一人前であるように、アイゼンをつけたら相当歩けるが、そこに何か事故でもあったら意外な弱点を暴露する危険があるのである。このような基礎訓練の不足の上に先輩の意見を盲信する弊がある。併しその反面著しく懐疑的なこともある。これは何れも咀嚼翫味していない證拠で、例えば登山の注意何箇條を教えられてもどれが最も大切であるか判定する能力に欠けているように思われる。もっともこれは指導する側の先輩にも大いに責任があるわけで、育って来た時代の違う後輩の立場を十分認識していないことにも依るであろうが、それを望むのは少し無理である。自分のように科学の面で絶えず学生の指導に携っていて、相当な年令の開きがあるために、こうして育って来た時代の違いをいつも考慮に入れていなければならない立場の者でも、ともするとそれを忘れ勝ちで、指導の方法に適切を欠くことが多いのは自分の至らぬためとは言え、他人には絶対ないとは保証し得ないことと思われる。

　こうした事情を認識して先ず基礎的な事からしっかりと身につけてもらいたいと思う。この点は先人の記録を読む場合も同じである。いつでも先人と同じ山行が出来るとは限らない。単に時と天候その他の條件が同じならいつも同じというわけではない。その人の過去の経歴という大きなファクターがあることを忘れてはならない。又、単に一つのルート、一本の道だけをいくら検討しても、それだけでは山行は出来ない。必ずその附近の地形その他の特質を十分に把握すべきであって、そうしなければ肝腎なルートの本質とか特徴を正しく理解することは出来ない。検討は精緻を要することは勿論であるが、山という一つの全体をよく見ることを忘れてはならない。

八方より鹿島槍へ

久 保 三 朗

昭和二十五年三月二十七日――四月十三日

三月二十七日

　松久（M4)、加藤（S2)、家田（M2)、久保（T2）　二十三時十五分の列車にて大阪発

三月二十八日

　午後七時細野着。大久保先輩及び徳永（M4）大阪発

三月二十九日　晴天　第一回黒菱荷上げ

　午前中チッキで送った食糧、テント、ザイル等を四谷へ取りに行く。一番の汽車にて大久保着。午後以上五名にて黒菱に荷上げ。雪の半ば消えたナキ山の登りには全く閉口する。ナキ山の上にてスキーを捨てワカンをはく。荷が重いためゆっくり登り黒菱七時十分着。八時発急いで下り九時十分細野着。高曇りの月明にて月は笠をかぶって居た。徳永二番の汽車にて着。

三月三十日　雨　第二回黒菱荷上。

　朝より雨。いつでも出られる様用意して待つ中、雨もやんだので四時出発す。やはりスキーを用いず。七時三十分黒菱小屋着。

三月三十一日　曇　下樺荷上。

　七時四十分発、九時十五分第一ケルン、十時四十分第二ケルン、十一時まで休憩、十一時三十分第三ケルン、十二時三十分下のカンバ着、平川側の斜面に雪洞を掘る。三時間かゝる。荷物全部を入れ、徳永、松久、久保残る。加藤、家田、大久保下る。

四月一日　豪雨、強風　停滞。

雪洞では雪、黒菱みぞれ雨、連絡のため家田、加藤三時五分黒菱小屋発、四時十分雪洞着。ずぶぬれになりものすごく寒い。合議の上久保下る事とす。積雪量一晝夜の間に約一米増加しデポしたスキーが殆ど埋って居た。四時五分発夕凪にて雨風のやんだ中を滑降し五時十分黒菱着。

四月二日　快晴、烈風　停滞

夜半より強風、九時頃に至り風も少しはおさまり陽もさして来たので四名九時三十分に残りの荷を負って出発、強風が積雪を吹きつけて顔の痛い中を登る。四名ともスキー、第一ケルンの附近から、ますます風強く雪面もクラストして数度吹き倒され、伏しては風の間をねらい前進したが第二ケルン手前附近にてかなり長い間待っても風の間なく十一時三十分に遂に引返す、風に吹きおろされる様に下り十二時三十分黒菱着、昨日ピッケル、アイゼンを雪洞においてきたのは失敗なり。一方雪洞にては今日天気が悪ければ下るとの昨日の約束により松久十時雪洞発、雪洞内にてかなりの強風と感じていたるもそれ程と思わずにワカンにピッケルを持って下る。クラストの斜面と強風のためピッケルで確保しつゝ這って下ったるも眼鏡やリュックサイドに入れたるもの等を風に飛ばされ、自身もしばしば吹き上げられ苦心惨憺のあげく二時黒菱小屋着。この頃より漸次風勢も衰えてきた様なので再び加藤（ワカン）家田（スキー）にて三時出発、第二ケルン附近にて下り来った徳永（アイゼンピッケル）に出合う。徳永は五時三十分黒菱着、加藤、家田はなお前進したるも第三ケルン手前の斜面がクラストし加えて強風のため登れず約二時間の奮闘の後諦めて引返す。六時三十分黒菱着。

四月三日　曇後快晴　唐松荷上。

昨日の強風の名残あるも大体において天気は良くなりそう故七時三十分黒菱発、第一ケルン付近ではかなり吹かれたが十時三十分雪洞着、時計が二つしかなくおまけに二つとも狂ったり止まったり随時という代物故今後時間記録は怪しくなる。荷物の持てない分は雪洞に残してスキーは岳樺にくくりつけておく、十一時三十分雪洞発、風もやみ高曇りのおだやかな天気の中を発ち、二時三十分唐松小屋着、この日黒菱より唐松へ往復した三人のパーティー他に一組あり、夕方迄居住性の好転に努む。

四月四日　風雪、雨　沈澱

四月五日　晴後豪雨　五龍偵察

八時起床、高度二千五百米の一面の雲海、高空には巻雲層あり、風もやゝ強かったが剣は朝日を受けて輝き、まず晴天、起床のいささかおそいうらみあり、大急ぎで準備、徳永、大久保、加藤の三名は五龍岳の附近に雪洞を掘るべく九時五十分出発。

松久、家田、久保の三人は雪洞へ残余の荷物をとりに下る。十時五十分唐松の小屋発、登る時のため小またにて足踏して下り十一時三十分雪洞着、十二時頃よりみぞれとなる。荷物は全部もち、スキーは木にくくりつけて残す、もし冬用のテントをこゝへ張って居たならばあの強風で吹き飛ばされて居たことであろう。十二時三十分雪洞発、風雪は烈しくなって来て視界は効かず、今朝の足跡も大分わかりにくく中を登りずぶぬれになって二時五十分小屋着、火をこしらえた所へ五龍へ往復した三人が三時三十分帰着、夕方よりものすごい強風となる、天井のぬけた所へグランドシーツを張り風の吹きこんで来る隙間に炭俵をつめる等して室温を上昇させ衣類の乾燥に専念する。

四月六日　風雪　沈澱

四月七日　晴後曇　五龍前進

六時起床。晴天なれどやゝ風あり、高空には巻雲。五日分の用意をなし、九時五分小屋をしっかりしめて出る。重荷を背おっての牛首の南面下りの悪場は険難、大黒あたりはかなりもぐる。この頃よりガスが出始めやがて捲かれて雪が降り出す、明るく雲のうすいことを感じさせるが晴れそうでなかなか晴れない。二本松ピークから大黒銅山へ下る尾根へ少しはいったがすぐ気がついて白岳の登りにかかる。白岳を越え鞍部から雪洞地点へ近づいて尾根が悪くなって来ると共に、天候の方も悪化してきてとうとう本降りとなり風も強くなって来た。春というのに一日ももたない天候を皆でうらむ。二時三十分雪洞地点着、一昨日掘った分は昨日の雪ですっかりうずめられている。ここの位置は五龍の東峰 G1 とその東側にある小峰との鞍部の信州側で、槍の殺生や穂高小屋から唐澤へ下りかけた所にあるのと同様な氷河によるものではないかと思われるカールの南側圏谷壁である。

正面には G1 の東壁を見、前は圏谷底で少し平らになりそれから白岳澤へ一気に落ち込んでいる。雪量は意外に多くて、すぐ岩が出るかと思ったが案に相違してつめれば十人入れる位の大きいのを三時間かかって掘ったがなお相当あるようであった。外壁のブロックを積みはじめたのが五時三十分頃、天候はますます険悪となり風も強くなり、柱状結晶の細い針の様な雪が吹きつけヤッケもズボンもばりばりに凍っている。鞍部においてあった荷物を取りに上ると三時間の間に全くうずもれていた。六時三十分ともかく雪洞を完成、食事をすませ、寝る。

四月八日　ガス　滞在

明け方寒さに目をさますと夜の間にブロックの隙間から入った雪は円錐形に高くつもり、入口のグランドシーツを吹き開けて飛び込んだ雪は入口に近い方に寝た二人のシュラーフの上に積って居る。天候をのぞきに行くと吹雪、今日も沈澱と決める。ラヂュウスで昨日ぬれた衣服を乾かさんとしたが濕気の多いためか成功せずガソリンも惜しいので断念する。今まで十日入って居て、完全に晴れたのは一日だけ、この調子で悪天候が続くとすると明日も吹雪なれば次の晴天には残念ながら引きかえさなければなるまい。夕方近く頭が痛くなったり立ち上ると胸がドキドキするものが出てきたので一度全換気の必要を感じて靴をはき入口のグランドシーツを取除けに行く、入口を開けると雪はやんでいたので外に出る、霧は流れているが高空は晴れ西の空は剣も見えず雲の高度は高いが夕焼けで明日は晴天になりそうである。しばらく外にいると雪洞の中がいかに暖かいかわかると共に、その空気がいかにガソリンと練乳の酸敗した臭で充満しているかがわかり、あわててピッケルをブロック壁に突き差してベンチレーターを作る、今朝からの積雪に風は途中からやんだので孔が全部ふさがれていたらしい。夜は明日にそなえて七時に寝る。

四月九日　快晴、零度　鹿島槍アタック

四時起床、昨日の見込み通り晴天、炊事をしながら入口を通して見ていると暗紫色の空に黎明の五龍が美しい。七時出発、七時四十五分五龍頂上、前途に時間をくうことを思えばすばらしい展望にもゆっくりしているわけには行かぬ。直ちに出発相当もぐる粉雪の斜面を下りクラスト雪をかぶったガラ場を左に捲き気味に G3 の岩稜に取りつきルートを求めてこれを越える。昨日までの悪天候を一気

に取りかえした様な晴天だが気温は相当低く着ているものは凍結し岩にふれた手袋は凍りついて引離さなければならない。G4 G5 とどれがどれやらわからないままに登ったり下ったりして大体主稜線通りを進む、カクネ里降り口九時三十分、最低鞍部の附近からしばらく黒部側を大きくトラバースし鹿島北槍を正面に大きく望むピーク（二六二〇米）の手前から再び稜線に戻る。これから二つばかりピークを越え急な下降を終ってキレットの廃小屋につく。小屋は壁板全部なく中には雪が丈余に積っているがブロックを積むなれば雪洞よりは余程樂に使用できるであろう。晝食をすませ出発、小屋の南側の急斜面は相当困難、はじめてザイルを使用する。すでに十一時五十分、これから先キレットがあるし六人でザイルパーティ二組で行くと非常に時間をとる故大久保、松久、久保の三人は引返し、徳永、加藤、家田の三名は可能な限り前進することとする。

キレット小舎より鹿島槍（登頂隊員の手記による）

　全員鹿島槍をめざす私達六名はキレット小舎を出発後直ちに小舎側上の登攀に掛ったが約十数米をダイレクトにステップ・カッテイングで登った処でカクネ里側に張り出した雪庇に続く比較的軟いオーバーハングに阻まれた。不安定な位置のまゝブロックを切らずにピッケルを二本使用して急激にやせた尾根上に出る。「小八」「大八」とつづくこの稜線上に立って漸くこのまゝ全員鹿島槍登頂に向う不利を察し、若干の偵察の後やむなく徳永より後続の二名に登頂断念の旨を伝え大久保先輩にこれと同行していただく。登頂隊となった徳永・加藤・家田の三名はアンザイレンし露出した岩を目印に一尺足らずのアレート上を伝いカクネ里に身を投げ出す「小八」のギャップをぶら下がって降りる。こゝは昔細野の人夫が墜落死亡した処で夏道はくさりづたいに尾根の下をまき関学の人が昨春使用しているけれどもくさりは使用不能である。このくさりが埋もらずに使えると丁度「小八」の処にトラバース出来る。キレット小舎直上の壁はダイレクトに採るよりも黒部側へ草つきを利用してトラバースするのが正しい。「小八」ギャップから少々態度の良くなった尾根上を辿ると「大八」即ちキレットである。稍上向きの雪庇を思い切って越え雪庇基部のハイマツを頼りに体をのり出すとやっとキレットの底がみえた。底の見えない下降は危険至極である。晴天の割に気温は非常に低くしばらくじっと立っていても我慢のならない寒気におそわれる。廿五米の補助ザイルでジッヘルしカクネ里を股間にのぞきながら二米足らず下った処で眞黒にくさったフィックスのザイルを見付ける、これがぶらさげてあるのはキレット降路

中唯一の頼り得るハイマツの枝である。日陰になって冷ややかな黒部へつゞくこのギャップのボーデンは両面を絶望的な廿米の岩壁にはさまれ、句字通り陰惨そのものという気がする。キレット小舎よりこゝまで息をつくひまもない位だったが一時間位の時間を喰っている。一応このギャップの四十米程下って見たが取付き点なく、夏道通りクサリを掘り出してトラバースを開始、いきなり開けた鹿島の山容を得てからは朗らかな？稍々順調な登攀が出来た。登行に当って表層の雪面がくずれ落ちるために、急激に登ってゆく稜線を比較的忠実に辿り、頂上直下を少しまいて午後二時半北槍ピークに立つ。劔・立山の西空に黒雲が蔽い始め、気付いた私達の頭上に大きな雲の塊がつゞいて北へ流れていた。風と共にガスが時折遠くの視界を包み漸く天候が崩れ出す。キレット小舎への帰路は全く難なく至極順調に運んだ。

一方引返す三人は万一前進班がビバークする時の用意に食糧、マッチ、ツエルト等をキレット小屋に置き往路を引返す。キレット小屋の北のピークからキレットへ向って前進する三人を認めヤッホーをとりかわす。それからしばらくして先の二六二〇米ピーク附近からふりかえって見た時にはもはや何も見えずそこで二十分以上まったがなお北槍に向う稜線上には見当らず引返す道々ふりかえっては姿を求めヤッホーを叫んだが応答はない。天気は相変わらず晴だが西方立山連峰附近に積雲が出始めこれが午後から出た風に乗って五龍のあたりまで流れて来る。もはや五龍をこえてからやっと応答があって安心した。前三人は日没と同時に後三人は日没後一時間後に雪洞帰着、共に帰りの五龍正面の登りは相当えらかった。夜は大いに御馳走する。

四月十日　快晴　唐松へ。

　なるべく持って帰る荷物を少なくするために食糧をどんどん食う。十一時四十五分雪洞発、昨日の積雪は消え風も納まって晴天、安曇野は春霞がたなびいている様でありまことに春らしいのどかな天気である。この雪洞の位置は雪量の点荷上げの点よりして誠によい場所であったと言う事が出来る。昨日で疲れた足に荷は相当重かったが帰り道の事とて気は軽く来るときはガスにかくれて居た五龍に見送られ立山連峰を存分に眺めつゝ三時二十分唐松の小屋に着く。不帰偵察をも

かねて唐松岳頂上に出掛ける。この日多数の雷鳥を見る。始め八方尾根でまごまごしなかなか上れなかった唐松の小屋も今はもうふもとに下った様な気でいる。

四月十一日　快晴　不帰偵察

　昨日午後から西の方より拡がって来た高層雲でぼんやりした高曇りだがまだまだくずれそうもない天気、又機会もないだろうから午前中不帰の偵察に行く事とする。九時三十分留守の大久保氏を除いて五人三本刃を通ってそのも一つ北のピークまで行く。十一時小屋に帰る。一時小屋発八方尾根を一さんに下り雪洞の所でスキーを持ち荷重のためスキーはできず例年より雪のきえるのの早い八方尾根を時々腰まで落ち込みながら四時過ぎ黒菱小屋着、黒菱より谷道を下り六時細野着。

四月十二日　晴

　送り返すものを荷造りし三時四十分発にて帰路につく。

四月十三日

　午前帰阪。

春山食糧報告

　冬山の経験を基礎にして、嗜好とカロリーを加味した予定献立表を作成し、出来るだけ余分のものは省くことにした。この為野菜は少なくして、ビタミンＢ・Ｃの注射を時々行うことにより、体力の低下の防止を行った。

　主食は一日二千五百カロリーを標準とし、米二合、餅一合、乾パン三百瓦を一日分とし六人十日分を準備した。次に食糧の一覧表を書く。

　米七升、餅七升、カンパンは小麦粉六貫目、副食は豚肉一貫、乾魚六百匁、ソーセージ二百匁、玉ネギ三貫、ワカメ二束、味噌飯盒一杯、油六合、カレー粉二箱、塩三合、バター半封度、砂糖一人半斤、コーヒ若干、アメ若干。尚その他個人的に持参の罐詰六個、練乳五個等。

以上を総計百六十八食で消費し、平均一食千七十カロリーで主食副食共過不足なく予定の計画を遂行することが出来た。一食平均三十円十八銭で、その中主食費十九円四六銭、副食費十円七二銭かゝった。（松久）

春山會計報告

出発より帰阪迄全員一緒に行動し、要した費用は左の如くである。

	細野泊	黒菱泊	唐松	荷上げ	食費	細野支費その他	小荷物運賃	その他	計
全　体	3,000	3,000	300	300	5,070	630	300	500	13,100
一人当り	500	500	50	50	845	105	50	83	2,183

春山に用いられた計画的ビヴァークとしての雪洞

家　田　千　尋

我々が廿五年度春山に於て建設した二つの雪洞につき、計画にもとずいて考慮されたのは次の諸点である。

一、建設地点の融通性

後立山稜線の唐松岳以南はキレット小屋を用いぬ限り、キレット迄の間で白岳、大遠見を除いてはフォースドビヴァーク以外の計画的になされた天幕設営に関する記録が、殆ど無いと云ってもよい位である。よって積雪期に於ける天幕の設営地については、予備知識が稀薄であると云わねばならない。更に、我々が目ざした鹿島槍には、一旦大遠見に下るか、或は白岳に作られたアドヴァンスキャムプからではアプローチが長すぎる事より、更に前進して少くとも五龍の直下、及び五龍を越えた向う側に建設しなくてはならない。その場合、天幕によるよりも設営に融通性の持てる雪洞に傾いたのは当然と言えよう。

二、耐風

建設地点の考慮により、風に対して抵抗少く地形にナイーヴな事及び壁の厚さによる防風は天幕と比較される時数段之に優っている。更に後立に於ては、風は

普通の気圧配置によるならば大体黒部側から信州側に向うものと見做すのが妥当である。この場合建設に要する雪量を考うれば、当然稜線よりもどちらかに寄った稜線直下数米に置かれると思われるし、その場合黒部側に下るよりは信州側に下る方が雪洞の入口を風下に向けることが出来る。幸いな事にこの稜線よりの傾斜角は黒部側にゆるく信州側に急勾配である。故に稜線上に、又は傾斜のゆるい黒部側に棚を作って風に曝すよりは、信州側に殆ど棚を作らずに、いきなり横穴を掘る事により耐風及び発掘時間の短縮がはかれる。

三、重量

天幕の附属品とも云うべきシャベルやノコギリの軽減が、如何に重大な因子であるかは言を俟たない。

我々は只一回の荷上げを要しただけで牛首を過ぎ、五龍の肩に至る迄、全装備をもって約八貫以内にとゞめ、日数、アルバイト、食糧を軽減し得たのである。

四、設営に要する時間

天幕で約一時間半、雪洞では人数、雪質、構造を考慮に入れて約二時間より二時間半と予想された。この場合、天幕に有利であるが我々の計画よりすれば、雪洞設営地迄完全な一日行程ではなく、日没前三時間の余裕は充分に見る事が出来る。

五、撤収

撤収に、天幕よりより簡単である雪洞の有利及び「岳人」に於て関西登行会の強調した如く、一旦天候の急変等により逆行を余儀なくされた時、雪洞に帰着し、再度の生活に堪え得る事は天幕に於てはその比を見ない。

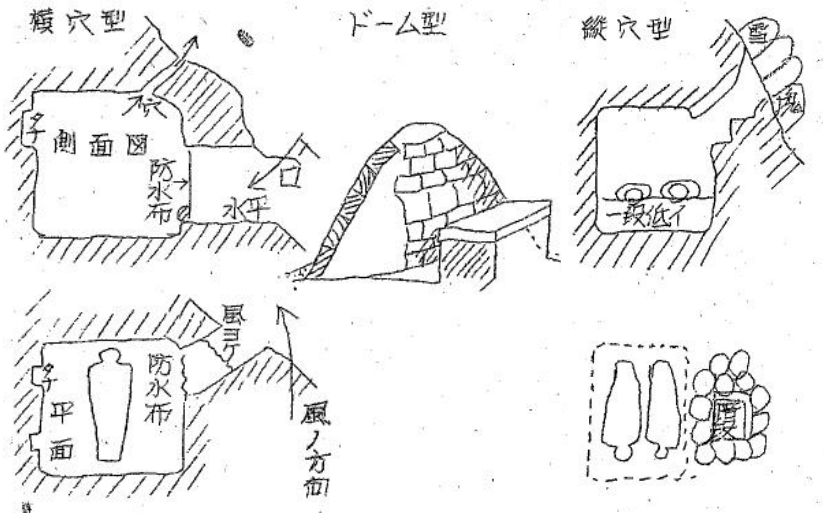
六、居住性

湿度、気温については天幕より劣るし、雨の（以下不明）

以上の考慮を以て行われた雪洞生活はその予想を曝けながらも之を裏書きし、危惧をもたれた居住性をも克服し、大過なく計画を終る事が出来た。

雪洞の構造の一般的概念

「ケルン」57 号 23 頁の「雪洞雑考」に於て、諏訪多恵蔵氏はスノーホールの型として、ドーム型、横穴型、縦穴型、雪中型を分類して居られる。現代のイグルーに属するものは大体ドーム型に、雪洞を横穴、縦穴型に入れて考えてよいと思われるが是を図示すれば次の如きものである。



我々の用ひた雪洞について

第一型のイグルーは、廿五年度冬山に於て我々は、初めて中京山岳会の指導により建設したのであって、今なほ実際に用ひる段階に達して居ない事より、之をすぐに春山計画中に算入すべき何等の理由はなかった。又、雪中型も当然問題にならず、残る横穴型、縦穴型をとるべき場合に於て再び諏訪多氏の言によれば、「横穴型」傾斜面や堆積してゐる雪に横にホールを作ってゆくので最も多く使用され、理想的な方であらう。以下畧

「縦穴型」平地又は斜面に作るもので横穴も併用せねばならない。以下畧

前にも述べた如く、信州側の急斜面に作る事を第一條件とする我々は、横穴を、それも実働人員、斜度、時間の節約、外界との連絡（之は主として天候を対象とする）を加味して、変則な、又幾らか関西登行会によって行はれた雪洞をまねて作って見た。

我々の作った雪洞は八方尾根第三ケルン上の下樺に於けるものと、五龍 G1G2 のコル、通常ルンゼ(1)に於けるものでるが前者は單に荷物の中継として、便宜的に使用したものであって、先に述べた條件を決して満足してゐるものでない事は云ふまでもなく、之は單に参考として、こゝに加へる程度にして、後者を重点的に見たいのである。

横穴の利点は作業能率が縦穴に比しより大である、この場合、雪面の傾斜が或る程度多い程有利であると云へよう、と云ふのは掘りくずされた雪片の処理が非常に早く簡單に行はれると共に縦穴に比し、自然薄くなる天井は傾斜度の増大によっておぎなはれる。

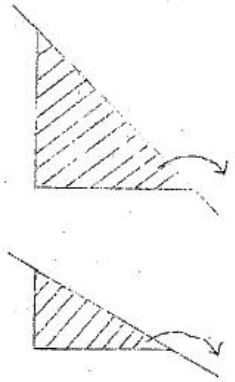
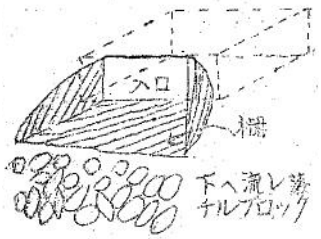
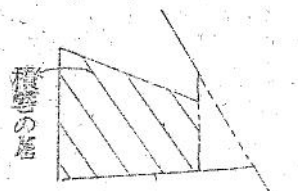


図 a

我々の行った発掘法を逐次的にのべると、先づ傾斜面に棚を作る事より始る、この場合も傾斜の強い方がかきくずれる雪片は少くてすむ。（a 図）又、雪を下に落し流すのに都合がよい、之がすむと二人が並んでそのまゝ奥に向って横にホールを掘って行くが、この場合、入口を考慮に入れずにそのまま高さ約一米強、横幅二米弱のまゝ掘り下げて行く、奥に入って行く事により先に作った棚に予裕が出来ると、そこへグランドシーツをひき、前面及び上面のかきとった雪をその上におとし、他の二人が之を引きずり出して棚より外に投げ落とすのであるがこの場合も先に云った如く棚の小さい方が引きずり出すアルバイトも少なくてすみ、又、外に落す雪片が棚の外側に堆積する事なく、全部下へ流れ落ちる。之をくり返す事によって、斜面の横腹に大きく矩形の穴が出来るわけであるが、この場合、シャベルをもつ二人が更に収容人員に応じて両側をかき落とす、そして奥行が入口より約二米位で大体の格好がついた事になる。（b 図）天井は大体両側の壁についてゐる積雪の層に沿ひ幾分之よりは傾斜をゆるくしてけづった、即ち奥ほど高く入口が低い方屋根である。（c 図）



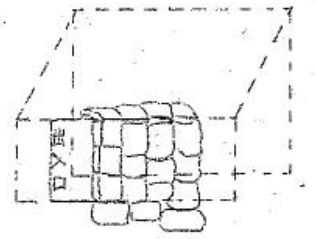
b 図



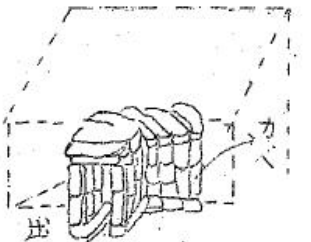
c 図

之は別に大した意味はないが左右両側及び奥に物を置き、又人が位置するために、天井のしづくを一側に集めんとしたのである、かように作られた天井が平面及びドーム型に作られた天井に比しそれ以上沈下したとは思へなかったし、雨にも充分耐え得た。

さて、床及び入口であるが、先に入口を考慮せずに、只作業の能率を増すために大きくとったこの入口を、半ばイグルー式にブロックで以てふさいだ。即ち作業員の足によって充分踏み固められた床に、ノコギリ、シャベルによって長さ四十乃至五十糎、幅、厚さ、共に約廿五糎位の矩形のブロックを切り之を出入口とする一側を残して、殆んど全部をブロックの堆積によりおほひ、更にこの作られた壁と先の大きな入口のひさしとの間にも積んで天井もふさぐのである、（d 図）又、残した入口は棚に約長さ八十糎位の之もブロックの堆積によるトンネルとなし出入口を作った（E 図）。

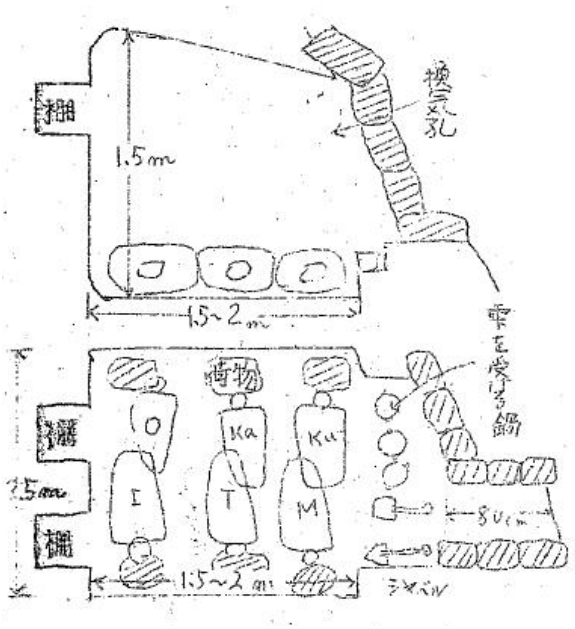


d 図



E 図

又、ブロックを切ったが爲、床は一段低くなり中で立てる程度であった、ブロックは完全な矩形にはならないので積んだ時、多くのすきまを生じたが内外より小さい雪片を孔に押しあてゝ之をふさいだ、一部はそのまゝ残して、換気孔に利用した。



以上掘るのに二時間半、入口を作るのに卅分、六人三交替で（シャベル二名、雪のかき出し四名）で三時間を要している。

八方尾根下樺に中継として作ったのは規模は之に似てやゝ小型、天井入口も同概念で収容人員四名であったが之は高度低いため雨を受ける率が多く、天井も薄かったが充分使用に耐え得た、又樺を利用して下敷としたゝめ殆ど濡れる事はなかった。

道具として携行したものはシャベル三（大一個、軍隊用中型二個）、ノコギリ二、であったがシャベルの中型一個は作業の初期に柄のつけ根の鉄の部分が折れたので実際は二個を用ひた事になる、春雪にはシャベルは重量がなければ効果は薄い様に思はれる、又柄も相当長くて丈夫なのが望ましい、取手のついた柄で力まかせに雪面にぶつけるのは非常に能率が良かった、而し雪が固いために無理にこぢると柄のつけ根から折れる危険性が大である、大型シャベルの方が効率が良く、並んで掘ってゐる二人が時々左右シャベルを交換しないと一方ばかり深く掘れる様な状態であり型の揃ったシャベルの方がよいと思はれた、之がため現在市販の尖りのある大型シャベルが矢張り適してゐるのではなからうか、之はもっとも柄と分離出来ないうらみがあるが、ノコギリは尺刃で専らブロックを切るのに用ひられたが、柄が凍りついて丸い団子が出来るので扱ひ難い。

雪洞生活

温度

外界の気温に影響される事大であるが、この春山は後立稜線でも雨にやられた程で相当暖かかった、室温は大体日中暖房具を用ひずして二度位であった、炊事時はラヂウス二個を用ひて約八度である、この点唐松の小舎の室内温度早朝に零

下十度であった事に比し、ずいぶん暖かであり、冬とは問題にならぬ程気温にめぐまれてゐる、夜中でも寒冷のために目を醒ます事は殆どなく、そのため夜中の気温をはかり得なかったうらみもある。

濕度

　矢張り相当高いと思える、生活した四日の間に体にこたえる程ひどいものではなかったし、むやみに物がしめると云う事はなかった、濡れるのは皆と云ってよい程床に原因するものであった、只炊事の時に気温の上昇と炊事物の湯気のために入口から約二米の奥が日中でも白くかすんで見えなかった事があった、濡物の乾燥には消極的な方法しかとれず、体温に頼った。

換気

　雪洞が余り埋まらなかったし、入口が外界によく接触してゐるので夜中でも窒息の危險性はなかったが、炊事に用ひたガソリンのガスが充滿することがあったが強風の時は自然に雪洞内の換気がよくなるし、入口があけられる場合も多かったので以前は天幕内でよくやった嘔吐もこゝでは一度も見られなかった、換気孔は入口の壁のブロックに小さな孔をあけた程度である。

風

　大体風下にあったので、よく之を防ぎ得たが壁がうすいのと入口が大きく、入口と室との距離が短いためによく外の音が聞こえてゐた。

雨

　雨による天井の沈下し雫の落下を恐れていたが、心配した程でもなく充分に堪える事が出来た、沈下をはかる事は出来なかったが目測でもさう大したものではない様に思えた、而し八方尾根のは天井がうすく、よく雨があたるので天井が青くすいて見えて来て明るさは申し分なかったが信頼性はもてなかった、気温上昇と雨による雫は天井の構造狀入口の一側にしか落ちないで、之をコッヘル、飯盒でうける事により、充分炊事に供し得、殆ど雪をとかす必要はなく燃料を節約する事が出来た。

外界との接触

　風の項でも云った様に室内と外界との距離が非常に近く、それがため室温の低下、風の吹きこみと云う欠点があるが換気、及び外界の気象條件を寝ながらにして知るという利点があった、即ち風の音により、又少しの隙間より入る吹き込み工合により、そのたびに入口をあけなくても外界の狀況を知り得た。

炊事

炊事は天井からおちる雫を用ひる事によって行はれた、之も後には段々ラヂウスのガソリンの蒸気が混じて再落下する事により臭くなって来たがそれでも充分用ひる事が出来たし、燃料節約の爲進んで之を行った、日中はひっきりなしに落ちるが夜半は少く、朝にはコッヘル内に薄氷は張る程間欠的であった、なほ水は夜中におちて来るものの方が美味であるのはやはり体温によってとけた事によるのであらうが天井に煤がついてゐるので余り大差はない、又水を用ひる事によって、出発時間の短縮及び米が短時間で煮える等の利点があった。なほラヂウスは三個あったが、之を全部同時に使用する事はガスの充満、ひいては中毒の危險性があり、二個同時に用ふるのをマキシマムとした、炊事は換気を考慮して入口の横で行った。

その他

オーバーシラフは大部分用ひなかったが用ひた方が有利であり下からぬれるのを防ぎ、狭い雪洞内で夜中体を半分雪の壁におさへつけられても充分睡眠がとれる、下敷はグランドシーツ小二枚を一重に床一杯に広げ、その上にカボック五枚を用ひた。

入口はグランドシーツ一枚を垂らし、ピッケルで押さえた、濡物は殆ど手袋靴下に限られたが雪洞建設中にぬらしたズボン、上着も体温により一晩で乾かし得た、全員が手袋靴下を着用し、又シュラーフ内に入れて乾かしたが凍傷に対する危惧を有さぬ程暖かであった、而し一名のみアタックに用ひた靴が悪かったために一日中足をしめつけたのに災はいされその晩指を凍傷に犯された。

さて、之で我々がこの春山に於て用ひた雪洞について大よそを述べたのであるが、我々が今迄経驗し得た以上のなほ気づかぬ幾多の欠点を包含してゐる事と思ふ。

只今迄天幕と設営場所のコンビネーションで天幕内の生活等あらゆる研究がなされた如く、雪洞についてもその問題は同様に取り上げられ更に雪洞そのものの形態、雪質、雪量に対する考慮、気温、濕度、降雨の問題、天井沈下、発掘方法、居住性、装備等なほ我々の研究し、経驗しなければならない幾多の問題がある、之等の諸問題をお互に一つづつ解決して行く事によって、物量にめぐまれぬ我々が、積雪期に於いて、取るべきルートは幸ひにも此処からでも一歩一歩開らけ得るのではなからうか。

五月の槍より燕へ

新制部員　田　島　　汎

新制の学生が試験の爲春山シーズンを逸するのでその埋合せといった意味で五月始め連休を利用して何かやらうとういふ事は可成早くから決ってゐたがそれが槍平合宿から結局それを一歩のばして槍・燕の縦走と決ったのはもう試験も終ってからだった、リーダーに家田兄を加えて計六名、会計四宮、食糧川島・田島、装備小沢、記録二木、各擔にしたがって忙しい準備の数日の後我々は廿八日の夜篠田先生始め先輩友人に送られて大阪駅を出発した。

第一日　四月廿九日（土）晴

車中余り眠れぬまゝに一〇·二〇古川着、田舎とも思えぬ優秀なバスで船津へ、船津は小さな砿山町、鉛の全国産出額の過半を出すとかいふ更にバスにゆられて笠谷へ（一六·〇〇）栃尾まで行く筈が道路損傷の爲不通、仕方なくトレーニングとばかり歩き出す、焼を正面に歩くこと二時間にて栃尾を過ぎ神坂に着く、沖田氏方にて米、野菜を購入の上蒲田へ薄暮の空に槍穂高連峰が浮び早くも胸を躍らす、美しい、雄大だ、一九時蒲田着、その夜は疊の上にフトンでグッスリ寝る。

第二日　四月卅日（日）晴後時雨

六時起床七時出発、美しい残雪の穂高を前に見ながら足下の蒲田川に沿ってぐんぐん進む予定の如く道ははかどり九時頃には既に二俣（新穂高温泉跡）を過ぎて山懐深く這入ってゐた。左手に白銀色の美しい笠ヶ岳、物凄い岩場の錫杖岳をみる。穂高連峰は右手に益々大きく益々壯重にその威容を遺憾なく我々に示す、そのすばらしい白い稜線が青空に画くスカイラインは頗る印象的である、やがてボツボツ残雪が見え出し行くほどに多くなる、蒲田川は未だ足下に轟々と音を立てゝ流れている、白出谷も何の事なく過るがその四辺から残雪が益々多くなり夏道も雪におほわれて来る、沢といふ沢には大抵デブリが出てゐる、途中で一頭の兎をみる、毛皮はまだ白い彼の身輕さが皆の羨望の的となる。

十一時四十分、滝谷の少し手前で河原に降りて乾パンと紅茶で晝食を攝る、日はポカポカと暖かく雪山は美しく我々の周囲を囲む、聞えるのは水の音のみ、山の楽しさをしみじみ感ずる。

滝谷の大きいデブリを越えるともう谷は一面の雪である、輪カンをつけてずっと谷傳ひにいく段々(ダンダン)谷の巾が狭くなり両側のカンバの林が迫り遂に極めて細い谷間に至る、之を抜けるとそこが槍平だった、小屋は右手カンバの林の中にあった、スキーにはさぞよからうと思はれる、快適な雪の原、その中にある槍平小屋は頑丈ないい小屋だった、薪もあり雪は這入っておらず実に快適、お陰でその夜もゆっくりと暖かいシュラーフの中で眠ることが出来た。

第三日　五月一日（月）晴後曇

お一日〇槍ヶ嶽登攀、六時五十分小屋を出て一路沢をつめる、日は未だ中岳にかくれ雪は快くクラストして靴の下にザクザクといふ音が気持良く響く、懸念した天候は全く恢復、紺青の空が美しい、八時半予定通り右へ廻り込んで飛騨乗越を見上げる地点に至ってアイゼンをつける。しかしその後飛騨乗越迄が物凄い急斜面加ふるに山に入って二日目まだ調子が出ないが一般にコンディションは低調で案外時間を食って飛騨乗越着十一時、すぐに肩の小屋に至って昼食、さすが名に負ふ穂高の稜線、物凄い雪庇、その他悪い状態が手にとる如く見える、北アの盟主、槍の穂先、それは実に雄大そのもの、小槍をしたがへて威圧的に我々を見下す、ここは北アルプスの中心なのだ。

アルプス気分を満喫した晝食の終る頃、先程迄常念の肩にあった雲が忽ち空一杯に広がると共にガスが舞ひ上りアッといふ間に何も見えなくなって了ふ、そしてやがて雪が降り出した、仕方なく我々は此日は肩の小屋に停滞を決したのが一時頃、時既に変り易い山の天候は完全に崩れて了っていた。

幸ひ此処も又居住性は満点、雪は入って居らず薪もあり又我々は快適な山小屋の第二夜を送る事が出来たのだった。

第四日　五月二日（火）晴

出発前に空身で槍の穂先へと出かける、三一八〇米の頂上の眺望又格別、ドッシリした常念のピラミッド鋭い穂高の稜線、印象的な富士と白峯三山の脊くらべ眞白な白山、其他劍、立山それから所謂後立連峰、実に三六〇度の景観、みとれる事暫し、やがて下って愈々東鎌尾根にかゝる、大して悪いといふ状態ではなさそうだがもろい岩とくさった雪にやゝ難渋、しかし大した事もなく先ず難所にぶつかる、俗に東鎌の窓とよばれるあたりである、やせ尾根が急角度でコルまで下

って更に次のピークへと続いてゐる、ラッセルは大体膝まで、アンザイレンして慎重にここを通過して次のピークに立った、ステップを切った為に落下した雪が表層雪崩を呼んでゐるのに膽を冷しはしたがこのピークで晝食しかし寒いので晝食後はすぐ出発、それから後も同じ様な所の連続だった、尾根はやせているそして別にどちらとも不定に、兎に角切れてゐる角度のきつい方に雪庇乃至その根跡があり一つまちがふとふみぬく、そしてなるい方は稜線下ほんの数米から十数米の所に割目があり雪崩の危險を孕む、一歩も忽せにせず慎重に通過、天井丈沢のコルについて直に西岳の登りにかゝる、夏道によらず眞直に正面のカンバの林の中を登る、今度は危険はないが登りだ、蹴込み蹴込み登る。斯くて十八時半、西岳について驚いた、便所丈を残して小屋は跡かたもなくたゞ神戸大学のものと覚しき雪洞が一つある丈、早や日も暮れかゝり仕方なく我々はその雪洞を修理してその中へ入った、幸ひ風も吹かず案外暖かで雪の穴から月を見て風流にひたりながらシュラーフにもぐり込んだ。

第五日　五月三日（水）　曇後雨

　我々はどうやら寝て、朝には元気を廻復して勇躍愈々最后の行程燕山荘への出発準備にとりかゝった、しかし川島のみはシュラーフの性能の悪かった爲かあまり寝れなかった様で之が恐らく彼のへバッタ最大の要因であったのだらう。それはとに角、この日は朝からあまりいゝ天気ではなく朝焼のやうにもなり一時薄日が照りはしたものの槍の附近は常にガスが巻いていたのだった、七時半出発、赤岩を通過し愈々一月前神戸大学の八巻、詠村両君を雪崩と共に二の俣谷へ葬った地点へと差かゝった、西側は切れ東二の俣側は大して急ではないが稜線下数米の所にクレバス様のものあり、いかにも雪崩の起り相な所、大事をとってアンザイレンした為に思はぬ時間を食ひ、大天井より三つめのピークで既に十一時となり晝食をとった、その頃から天候は急速に下り坂の向ひ忽ち何も見えなくなったと思ふともう雨が横なぐりに降って来た、かくてやならじ急げとピークを下るとそこに神戸大の CⅢ跡があった、グランドシーツ一枚のみを収容し他は名を控へるだけにして先を急ぐ、雨は益々烈しくなって来る為に全員体までビショ濡れになる。

　大天井は大きな山である、所々に出てゐる夏道を目前に雪渓をトラヴァースしていたがその雪渓が大抵急傾斜を持ち幾つも幾つも待ち受けてゐる、次から次か

らトラヴァースにつぐトラヴァース、この間一度尾根を間違へて西北にのびる尾根を降りかけたがすぐに気がついて引返す、それやこれやで時間を食って切通岩は十六時三十分それから夏道を猛烈にとばしたがその頃既に疲労の色は全員に見えて来ていてた、一体この辺りの稜線は当面は物凄い雪だが西面は殆ど雪が消えて夏道が出てゐる、しかし夏道が東面を廻ってゐる所では「ラッセル」か「這松こぎ」かどちらかを選ばねばならぬ、それも皆疲労に拍車をかけたのだろう、雨といふ事も精神的方面に影響したか？、家田リーダーはまだ比較的元気のあった私に二人で先に小屋迄行って後で迎へに来る事を提案し可成ピッチを上げたが余りにも皆が遅いのでゲーロ岩にて待つ事にした、日は暮れて来た、雨はやまないもしやの不安が私の頭をかすめた、やがて四宮と二木がやって来た、家田リーダーは私と二人を残して最后に遅れてゐる二人の出迎へに出て行った、屏風の様に立った岩陰に佇んで三人は寒さ冷さに震へた、四宮らは相当疲労してゐるらしかったし、私とても始めての所ではあるし暗くもなっては行く自信はなかった、僅々歩いて一時間もかゝらないであらうが暗い中を小沢がやって来た、小沢も自信はない様だった、遂にビヴァークに決した、この雨の中で、それは寒さは寒し正に苦しい事だった、身動き一つするのもいやだった、「田島」、「何だ」、「小沢起きてるか」、「二木は」互にこんな事をいひながらうつらうつらして朝を待った、猶この日、家田リーダーと川島は一つ南のピークでツェルトをかぶって矢張ビヴァークしたのだった。

第六日　五月四日（木）雨

　悲壯な一夜は段々と明けていった、背部を小川の様に雨水が流れるもうシュラーフも何もかもズクズクに濡れていた、動くと冷さが身にしみる、このまま動かずにいたい様な気持ちもする、しかし、明るくなり四辺が見える様になると誰いふともなくごそごそおきては仕度を始めた、雨は依然として降ってゐる、たゞ視界が僅にきく様になった丈、何もかもが濡れしょぼたれてゐるので荷は重たい様だったがそう苦痛ではなかった、我々はたゞ小屋と暖い火のみ求めてゐたのだった、五時五十分苦闘の地を後にして燕山荘に向ふ、途中は何の事もない道だが案外手間どる、前へ行く者の蹌踉たる足取りをみて何か心細くなる、それでも、六時四十分無事燕山荘に着き得た、その赤屋根の見えた時の何と嬉しかった事よ、小屋の中で待望の火にあたって一休みの後、私と二木とで後続のものを迎へに出

発する、懸念された川島は、小屋とゲーロ岩の中間辺りのとある坂での下でヘタ張った様に坐って居た、私と二木が交互に支へてやっとの思ひで燕山荘につく位、恐らく睡眠不足と極度の疲労からであらうが、燕山荘に着くや否やヘタ張って了った。

稍く小屋に落ちついてホッとした我々はその日一日またゝく中に過してしまった。

夜に入って名古屋山岳会と松本工高の二パーティーが登って来て俄かに小屋は賑やかになった、小屋の山仲間集い－暖い火を囲んで－それは昨夜の事を思へば将に天国であった、たゞ夜シュラーフが未だ乾かないのでアンペラで寝た所が寒くて寒くて眠る事が出来なかったこと丈が玉にきずであったが。

第七日　五月五日（金）雨

未だ雨は降り続く、食糧もある事故、雨を衝いて下りずに悠々停滞、家田兄と二木がビヴァーク地に残して来たもの（川島のリュック）を取りに行った以外は誰も一歩も小屋の外に出ずに過ごす、食事に特殊の手法をこらしたりして退屈を防ぐ、その中四宮の「お好焼」は秀逸であった、夕方になって稍く雨がやんだ燕の頂きがきれいにみえる、そしてそのバックにアーベンロートが美しい、明日は晴、下山といふので早目にやうやく乾いたシュラーフにもぐり込む。

第八日　五月六日（土）晴

予想され通りよい天気、荷物を纏め小屋を清掃して九時に小屋を出発、振返って北アの連峯に別れをつげ一目散に下る、下りは何の事もないだゞどんどん下るだけ、途中悠々休憩を繰り返し乍らそれでも晝前には中房温泉着、釜と水で炊いた晝食に舌鼓をうち温泉に漬ってゐるともうビヴァークの一夜なんか忘れた様。四宮、小沢、私の三人が先発としてその日の中に帰る事となり、こゝでパーティは解散、全計画を終了したのであった。

今次の山行、それは雨にも降られたしビヴァークという破目にもなり随分と苦しい目にも遭ったがそれ丈に良い経験にもなったと思ふ、特に何故苦境に立ったか、苦境をさける事は出来なかったか？今次どんな点が成功したかと云う様な点を究明する時実に明日への前進が見られるのではなからうかと思はれる、最後に

我々に先立つ事一月我々と同じコースに於て雪崩の犠牲となられた神戸大学の八巻詠村両君の冥福を祈りつつ筆を擱きたい。

新制春山時間記録

四月二十八日（金）

二三時二五分

第一日　四月二十九日（土）

四時一〇分	岐阜着
五時二〇分	発
一〇時二〇分	古川着
一一時〇五分	発
一二時四〇分	船津着
一四時〇〇分	発
一六時〇〇分	笠　谷
一八時〇〇分	神坂着
一八時四〇分	発
一九時〇〇分	蒲田着
二一時〇〇分	就　寝

第二日　四月三〇日（日）

六時〇〇分	起　床
七時〇〇分	出　発
八時一〇分	二俣出合（新穂高温泉跡）着
八時二〇分	発
九時三〇分	神谷着
一〇時〇〇分	発
一〇時五〇分	白出沢
一一時四〇分	晝　食
一二時二〇分	
一二時四〇分	滝谷出合
一五時一〇分	槍平小屋着
二〇時〇〇分	就　寝

第三日　五月一日（月）

五時三〇分　　起　床

六時五〇分　　出　発

八時二〇分　　小休止

八時三〇分

一一時〇〇分　　飛騨乗越着

一一時一〇分　　発

一一時三〇分　　肩小屋着

一九時〇〇分　　就　寝

第四日　五月二日（火）

六時〇〇分　　起　床

七時四〇分　　小屋発

八時三〇分　　穂　先

九時三〇分　　肩小屋着

一〇時〇〇分　　発

一二時二〇分　　東鎌の窓（晝食）

一三時〇〇分

一八時三〇分　　西岳着

二一時三〇分　　就　寝

第五日　五月三日（水）

五時三〇分　　起　床

七時三〇分　　出　発

九時〇〇分　　赤岳頂上

一一時三〇分　　大天井前のピーク（晝食）

一二時三〇分

一六時三〇分　　切通岩

一八時三〇分　　ゲーロ岩

一九時〇〇分　　家田引返

二〇時〇〇分　　小沢着　就寝

第六日　五月四日（木）

五時三〇分　　起　床

五時五〇分　　出　発
六時四〇分　　燕山荘着
九時三〇分　　後続燕山荘着

第七日　五月五日（金）

九時一〇分　　燕山荘発
一〇時一五分　　燕山荘着（家田、二木）

第八日　五月六日（土）

五時三〇分　　起　床
九時〇〇分　　出　発
一二時〇〇分　　中房着
一六時〇〇分　　中房発（四宮、小沢、田島）
一九時五〇分　　安曇追分駅着

一九五〇年度夏山計画

昨年度我々は劍において岩登りを主とした合宿を行ったのであるが、本年は春山の偵察を兼ねて重点をむしろ縦走におき、七月下旬大阪を出発し、左記の如く劍に集り数日間岩登りをした後、平の小屋で三隊に分れる予定である。

（イ）富山－バンバ島－池の谷又は白萩川－三の窓－眞砂沢露営地
（ロ）宇奈月－アゾ原－仙人谷－池の平－眞砂沢露営地
（イ）（ロ）は合同し約三日間岩登りの後
劍沢－立山－五色－平
平にて次の三隊に分れる
（A）平－東沢－赤牛－黒岳－三俣蓮華－槍－穂高－上高地
（B）平－南沢－烏帽子－黒岳往復－雲の平－黒部上流－薬師沢－薬師往復－有峰－富山
（C）平－針之木－鹿島槍－五龍－白馬－細野
期間は何れも半ヶ月間程度である。

参加者は現役約十六名の他、大久保、伊藤両先輩が五色より参加される予定で、（C）隊は新制部員のみ六名となる様である。

尚先輩諸兄の御参加を歓迎致しますから、至急ご連絡下さい。

廿四年度ノート

◆ヒマラヤ遠征隊－何れも計畫実施中及計畫発表のもの

ノルウエー　Tirich Mir 7,700（ヒンヅークッシュ）六名（確定）

フランス　Dhaulagiri 8,172（ネパール）六名（確定）

デンマーク　Nanda Devi 7,817（クマオシヒマラヤ）第二登 四名（確定）

スイス　Kangchenzunga 北峯 五名（？）

オランダ　Schilla Peak（？）

◆廿四年度冬季各校計畫概署

立教　槍北鎌尾根ポーラー（成功）「山」三月号

法政　槍北鎌尾根ポーラー（成功）「山」三月号、「岳人」二四号

明治　明神東稜－奥穂ポーラー（成功）「山」三月号

北海道　カムイエクウキカン、ポーラー（成功）「山」四月号

立教高校　鹿島槍東尾根（成功）記録なし

魚津高校　劍北方稜線（失敗）「山」三月号

鈴鹿高校　明神最南端東壁（失敗）「山」四月号

阪大　白馬主稜（成功）「岳人」二四号、二三号、時報 No.1

（中京山岳会　白馬主稜（成功）「岳人」二四号、二三号）

（関西登高会　東鎌尾根縦走（失敗））

（登歩渓流会　槍北鎌尾根（成功）「山」三月号）

◆春山計画実施概署

慶応　北岳－聖縦走（成功）「山」六月号

早稲田　前穂高北尾根－北穂ポーラー（成功）「山」五月号、「岳人」二六号

立教　劍早月小窓尾根（成功）「岳人」二六号

神大　燕槍ポーラー（成功）

京大　五龍第五尾根・杓子尾根（成功）

同志社　栂池－不帰岳往復

関大　八方－五龍往復

日比谷高校　杓子尾根「山」六月号

阪大　八方より鹿島槍往復（時報 No.2）

阪大　　槍平より燕縦走（時報 No.2）

◆遭難　死亡分のみ

所属学校	（人員）	月日	場所
魚津高校	（一名）	一二月二八日	宇奈月附近
（備考）過労、心臓マヒ、「山」三月号、五月号			
神戸大学	（二名）	四月三日	西岳、赤岩間
（備考）二俣谷表層雪崩「岳人」五月号			
慶応大学	（一名）	四月六日	荒川岳小西俣
（備考）渡渉事故「山」六月号			

集　会　記　録

十二月廿二日～一月六日　白馬主稜登攀合宿

一月十三日　議題－本月廿七日に報告会（冬山）開催の件を決定、案内状は廿日迄に発送する、時報第一号発行

一月廿日　春山計画の実施のため専門部会の新設を決定、赤尾先輩（工学部、京城大山岳部 OB）より“白頭山、冠帽峰遠征時の装備について”お話を聞く

一月廿七日　冬山報告会、午後五時医学部紀念館二階にて開催、日本山岳会より諏訪田、太田、陸田、西岡等の各氏、先輩吉見、松本、伊藤、大久保の各氏が出席され、冬山を中心にご批判を頂く。

二月三日　春期の後立縦走を議題に討論あり

二月十日　太田、諏訪田（JAC）両氏より雪洞のお話を、又、京極先輩（応化）に皮の耐熱度のお話を聞く、旧浪高山岳部の木村先生、松本先輩（工学部）出席

二月十六日　新、旧制大学の休暇食い違いのため後立縦走計画を白紙に還元する。

二月下旬、三月上旬に亘り春山の準備小集会を開く。

三月十三日　水野祥太郎先輩送別会

近く国際連盟招待によりスイス経由渡英の水野祥太郎先輩（市大教授）送別の会を JAC と共催、阪大病院恵済団ホールにて開

く、出席者医学部 OB 国里、岡崎、恩地、新谷、大久保、他に JAC 関係者卅名、現役全員。

三月十七日　大久保先輩（第二外科）より凍傷の話あり、春山計画再編の結果、新制は五月上旬の約一週間槍平より燕へ、旧制は八方より鹿島槍と決定。

三月廿五日　春山装備の大半を湊町より発送

三月廿七日～四月十二日　春山（旧制）

四月十四日　春山報告

四月十五日　道場百丈岩、家田、由井浜、山本、久保、小沢、二木、田島、四
十六日　宮、川島。

四月廿一日　新制槍－燕計画にリーダーとして家田を決定、神戸大学燕槍ポーラー遭難に対し本会より見舞金四百円を送付

四月廿八日～五月七日　春山（新制）

五月五日～五月七日　比良全山縦走　山下

五月十二日　夏山計画のため劍－平小屋－槍（後立）を中心に討論する、佐谷（JAC）出席

五月十四日　道場ゆき、徳永、小沢、向井、今

五月廿六日　篠田先生　“Guicle Reg：The Matterhorn”の紹介
夏山計畫本極り

六月九日　六甲ゆき、大久保、伊藤先輩

六月十六日　諏訪田氏「ヒマラヤの慨説」講演、太田（JAC）赤尾両氏出席。

六月十七日　新制歡迎キャムプ、十一名　家田、大島、多喜野、田島、宮本、
廿　日　山本、岡田、内田、大久保先輩